

ぬらりひょん終

吉田 わかな

とある製菓会社の会議室

社長「えー、ではですね、今月の定例会議を始めたいと思います。まずは先月の売上報告から」

山口「部長」

部長「何だ山口」

山口「取り上げていただきたい議題があります」

部長「言ってみろ」

山口「商品開発部からあがってきたんですが」

山口、新商品のお菓子を取り出す

山口「こちらをみなさまに試食していただきたいと思ひまして」

部長「ほう。これは？」

山口「新作の焼き菓子だそうです。スイーツにうるさい十代から二十代の女性をあつと驚かせるような新商品を、というコンセプトで開発したものだそうです」

小関「どピンクですね。これ何がかかっているんですか」

山口「克蘭ベリー？のパウダーだそうです。中にはソースも」

小関「くらんべりい？」

山口「克蘭ベリー」

清水「かわいいですね」

山口「開発部の小林さんから、すごいのができちゃったんですけど、このすごさを表現する良い名前が思い浮かばなくて、ってことでした」

部長「うまそうだが、普通だな」

小関「どこがどうすごいんですかね」

山口「タブレットを示しつつ」こちらがパッケージ案だそうです」

清水「もうそこまでできてるんですね」

小関「いいじゃないですか、このパッケージ。女性っぽくて」

部長「で、あとは名前か」

山口「はい。いい案があれば」

部長「じゃあ、まず小関、食ってみろ」

小関「はい。いただきます」

小関、試食

小関「……………」

部長「どうだ」

小関「すごいです」

部長「本当か。どうすごい」

小関「もうめっちゃすごいです」

部長「答えになってねえよ」

小関「いや、食べてみてくださいよ、めっちゃすごいですから」

清水「それじゃ私たちもいただきますでしょう」

一同 試食

部長、清水、山口、社長「……………」

山口「すごい」

部長「これはすごいな」

社長「うまい」

清水「確かにすごいしかでてきませんね」

山口「え……消えた？」

小関「そう、消えた」

山口「消えましたよね」

部長「消えたな」

山口「え」

部長「え？」

清水「これはもう本当にすごい」

小関「うちの開発部天才じゃないですか」

山口「特許申請しましょう、すごいのできましたって」

部長「どうすごいって説明すんだよ」

小関「そこが問題ですよね。こんなにすごいのに」

山口「私こんなの初めて食べました」

清水「消えましたもんね」

山口「口に入って即ですよね」

清水「あれ？あった？みたいなの」

山口「あれ？今、食べた？みたいなの」

部長「小関、俺今食べたか」

小関「はい、召し上がりました」

部長「本当に？」

小関「では確認のためもうひとつ。(山口に)いいですか？」

山口「どうぞどうぞ」

再度 試食

部長、小関、清水、山口、社長「おおく」

山口「口どけ半端ない。消える。もう本当すごい」

小関「これ何個でもいけますね」

清水「止まらないです」

部長「いいじゃないか。これは売れるぞ」

山口「開発部も半年かけた甲斐がありましたね」

部長「早速大々的に売り出そう。まあ、社長がどう言うかにもよるが」

社長「俺？うん、いいと思うよ」

部長「それよりも先に商品名だな」

山口「そうでした。これは小林さんが悩むのも納得ですね」

清水「すごいしかでてきませんもんね」

山口「ちよつとつかみどころがないってどうか」

部長「食べたように食べた感じがしないからなあ」

小関「食べたように食べてない」

清水「食べてないように食べている」

部長「ん？」

小関「部長？」

部長「何だ、これは。この感じどこかで・・・」

部長、もうひとつ食べる

部長「食べたように食べてない。食べてないようで食べている」

小関「あの、部長？」

部長、さらに食べる

部長「いるようでない。いないようでいる・・・」

山口「部長？」

社長「え？」

部長「・・・ぬらりひよんだ」

山口「え？」

部長「そうだ、ぬらりひよんだ。なあ、小関」

小関「え？あ、は、はい。あー、ぬらりひよん。ですね。さすが部長」

社長「ぬらりひよんね」

山口「すいません、ぬらりひよん、とは？」

部長「ぬらりひよんだよ、妖怪の」

山口「妖怪？」

部長「何？お前知らないの？」

山口「すいません」

部長「小関、お前知ってるよな」

小関「えーと、はい、妖怪の長、みたいなやつですよ」

部長「総大将だよ。いいか、ぬらりひよんてのはな、総大将って言われるくらい高位の妖怪なんだ。でもって、いるかないかわからない、いないようできて実はいるっていう独特の存在なんだよ。どうだ、この口だけにびったりだろう」

小関「びったりですね。さすが部長」

部長「だろう。我ながらよく思いついたよ。どうだ、山口」

山口「まあ、確かに特徴だけ聞いたら」

清水「え、それで？」

部長「よし、商品名ぬらりひよんで行くぞ」

山口「え！」

部長「清水、これすぐ広報に回せ」

清水「え、あ、はい」

部長「それから生産ルートの確保だな。できたら社長に承認もらおう」

社長「いやあ、君、それについては先に」

山口「待ってください」

部長「何だ、開発の小林にはお前から話していいぞ」

山口「そうじゃなくて」

部長「じゃ何だ」

山口「この商品名を、ぬらりひよんにするんですか」

部長「そうだ」

山口「それはちよっと・・・」

小関「部長の決定だぞ。何か不満があるのか」

山口「不満とかですかですね、いや、さすがにぬらりひよんはどうかと思うんですが」

部長「何がいけない」

山口「えー、この商品はですね、先ほどもご説明したとおり、そもそもスイーツにうるさい十代から二十代の女性をあとと驚かせるような新商品を、というコンセプトで開

発されたものでして」

部長「それは聞いたよ」

山口「ですから、商品名はもつとその世代の女性に響くようなものにした方が」

部長「響くだろう、ぬらりひょん」

小関「響きますねえ、ぬらりひょん」

山口「響きません。あー、響かないと思います」

部長「何で」

山口「大体知らないと思うんですよ、ぬらりひょんを」

部長「知らないことあるか」

山口「私がまず知らなかったですし」

部長「お前だけじゃないの？」

山口「それはそうだとしても、じゃあ十代女性が知ってるかっていうと・・・」

部長「知らないの？」

清水「二十代はともかく、十代女性はどうでしょうね」

部長「そうか、それはいかな」

山口「ですよ。やっぱりほかの名前を考えて」

部長「じゃあパッケージにイラストと説明書きつけるか」

山口「え」

小関「いいですね、イラスト」

山口「そういう問題ですか」

清水「パッケージ案はもう決まってるんですよ」

山口「そうですね！さっきの可愛らしいパッケージ案に妖怪のイラストは」

小関「ゆるキャラっぽくしたらどうですかね？」

清水「ゆるキャラ？」

部長「いいな。ゆるキャラ。女は好きだろう」

山口「ゆるキャラ？ぬらりひょんの？」

部長「そうだよ」

山口「え、ぬらりひょんてそもそもどんなビジュアルですか」

清水「スマホの画面を見せて（こんな感じですよ）」

山口「想像以上にひどい」

部長「ひどいとは何だ」

山口「すいません。でも、無理があると思います」

部長「どこに」

山口「頭が大きすぎます。なのに体はひよろつとしてて、というかこんなお爺さんをどう

やってかわいいゆるキャラにするんですか」

部長「じゃあどうするんだよぬらりひょんは」

山口「一旦ぬらりひよんから離れたらどうですかね」

部長「離れてどうすんだよ」

山口「違う名前考えるわけにはいきませんか」

部長「お前、あのすごさをぬらりひよん以外で表現できるって？」

山口「だから、それができるかどうか考えませんか、ってことで」

小関「あー、それなら、ちよっと社長に聞いてみるってのはどうですか」

山口「社長に？」

社長「俺に？」

清水「そうですね。どうせ最終的に決定するのは社長なわけですし」

部長「そうだな。おい、社長今どこだ」

小関「電話してみます？」

清水「はい・・・あ、そうだ、すみません。社長今日、午前中会議の予定でした。忘れてました」

部長「何だよ、またかよ。あの人もいるって思うといけないよな」

社長「俺、いるけど」

部長「わかった。仕切り直すか。なあ、山口」

山口「はい」

一同 試食しながら

部長「しかし、どうしたもんかな、名前」

山口「これだけすごいとね、悩みますよね」

小関「めっちゃすごいです」

清水「小関さん本当にそればかりですね」

小関「それしかでてこないですもう」

山口「どう表現したら伝わるのかなあ」

清水「雪どけ？」

山口「口どけ？」

清水「いるかどうか判断する前に消えてますもんね」

部長「おいおい、うまいって言っているのか、それ」

清水「もうほとんどいる気がしません。一瞬味はしますけど」

小関「何でしたっけ。くらんべりい？」

山口「ふわって」

清水「そう、ふわって」

山口「あと、ソースが一瞬とろって」

清水「そう、とろって」

山口「で、もういない」

部長「おい、小関。俺今食べたか」

小関「はい、召し上がってました」

部長「本当に？」

小関「はい」

部長「ないよ。もういなくなってるよ」

小関「ですね」

部長「だんだんもう食ってる感覚がなくなってきたよ」

小関「そんなにですか」

部長「やっぱりぬらりひよんだと思うんだがなあ」

山口「ぬらりひよんもそうですけど、どっちかっていうと」

部長「ん？」

山口「社長みたいですよね」

部長「ああ」

小関「ああ」

清水「確かに」

社長「え、俺？」

山口「会社で一番偉い人のはずなのに、いるようでいないなんて」

社長「いるよ、俺」

清水「かと思えばいないようだったりしますもんね」

社長「うん、今まさにね」

山口「もう社長の名前にしちゃいましょうか」

社長「俺の名前？」

清水「何を？」

山口「この新作」

部長「え」

小関「酒井ですか？伸吾ですか？」

部長「どっちもだめだろ、センスねえ」

山口「部長がそれを言いますか」

部長「どういう意味だ、山口」

小関「そういえば社長何の会議出てるんですかね」

清水「さあ、そこまでは」

部長「もう会議終わってるんじゃないか」

清水「そうですね。電話してみます」

社長「いや、俺、ここにいるけど」

清水、社長に電話する

山口のすぐ横で鳴る。

山口「社長、電話忘れてっちゃってますね」

部長「基本ケータイを携帯しない人だからな」

小関「大丈夫なんですかそれ。社長として」

山口「それでなんとかなってるからすごいですよねえ」

社長「え、これ俺とった方がいいの？目の前にいるけど。清水さん？」

清水「出ませんね。社長」

社長「とるよ？とるからね？」

社長、電話をとる。そのまま切れる。

清水「出ませんでした。まだ会議中みたい」

部長「午後一で捕まえよう」

山口「捕まりますかね」

部長「ぬらりひよんだからなあ」

清水「でもこんなすごい商品、一刻も早く食べてみてもらわないと」

社長「もう食べたけどね。すごいよね」

小関「それまでに名前の候補決めないのですね」

部長「だめかあ？ぬらりひよんじゃ」

清水「商品のコンセプトとずれますからねえ。ねえ、山口さん」

山口「・・・」

小関「山口さん？」

部長「どうした山口」

山口「・・・私、今食べてますか？」

清水「は？」

山口「何だか一瞬過ぎて、もう食べた感じがしないんですが」

部長「何言ってるんだ山口」

山口「部長はありますか？食べた実感っていうか、そういうの」

部長「あるよ。あるよな？」

小関「はい」

山口「でもさつきなくなってきたって言ってましたよね」

部長「それは・・・え？ないの？」

小関「食べましたよね、確かに」

山口「本当に？」

清水「・・・そう言われると自信ないですね。一瞬で消えますし」

山口「ですよ。もしかして、食べてなかったんじゃないですか」

清水「は？」

山口「だから、最初から新作なんてなかったんじゃないですか」

小関「なかった？」

部長「じゃあお前、さっきもってきたあれ、何だったんだよ」

山口「私何かもってきましたっけ？」

部長「は？」

清水「そう言われるとさらに自信ないですね。もってきたような気もしますが。そんな

気がするだけな気がします」

山口「でしよう」

部長「・・・え？そうなの？なかったの？あれ？」

小関「なかったんですか。え？」

山口「あったような気もしますが、現時点ではもうないんですよ。だから、やっぱり最

初からなかったんじゃないかと」

部長「え、うーん・・・そう？」

山口「なかったんですよ」

清水「なかった・・・んですかね。そうかも」

小関「なかったのかな」

部長「なかったかもしれんな」

一同「・・・」

小関「それなら俺ら何話し合ってたんですかね」

清水「ですね」

小関「もう今日はこの辺にしときますか」

清水「ですね」

山口「社長も捕まらないことですよ」

小関「まあ、いてももうお話しすることもないですけどね」

部長「そうだな、終わりにするか。社長に関しては毎度のことだしな」

山口「いないようですよ」

部長「いるようですよ」

社長を除く一同「おつかれさまでした」

一同 社長を残し解散

社長「俺、いるけど」

幕